

ひとくち法話

ほうりんほうじゅ

## 宝林宝樹 (9)

この春、姪が成人を迎えました。

姉が着て、私が着た振袖を、姪も着ることになり、帯揚げや帯締めの色をあれこれと迷ったり、しまいこんでいた髪飾りを試したりと、久しぶりに賑やかな時を過ごしました。

かつて、私たちの支度に世話を焼き、着物を見立ててくれた祖母はもういません。祖母が生きた時代、着物は着飾って座っているものではなく、日常のものでした。白いかっぽう着でくるくると立ち働く祖母に、私は育てられました。

「あなたたちに遺したかった娘時代の着物は、戦争でみんな焼けてしまった」口惜しそうに言っていたことが思い出されます。

いつも私たちに目を配り、足の運びや立ち居振る舞いを繰り返し教えられました。そんな教えが身に染みて思い出されるような年齢になったのでしょうか。いつの間にか大人になった姪の姿の奥から、生きているうちは素直に頷けなかったいくつもの言葉が、聞こえてくるような気がしました。

十七回忌を過ぎてなお、私にはたらきかけてくれる祖母に、何度でも出遇わせていただく世界が恵まれてあることを、あらためてうれしく感じました。

